

翁と宿と蛇と

松岡心平

金春禅竹の『明宿集』は、正面切つて「翁」を論じた書である。禅竹は、「翁ヲ宿神ト申タテマツル」と説いた上で、さまざまな神や仏や偉人たちを、翁の本体・化現ないしは使者と位置づけている。

ところが肝心の「宿神」という概念がよくわからない。

禅竹は、「日月星宿ノ光下テ、昼夜ヲ分カチ、物ヲ生ジ、人ニ宿ル。三光スナワチ式三番ニテマシマセバ、日月星宿ノ儀ヲ以テ宿神ト号シタテマツル」と説明し、原題の『明翁集』をわざわざ『明宿集』に変えているが、全体として「宿」の意味が明示されているとは言えない。

と云つて、宮中の内侍所を守る守宮神、あるいは境界地にある宿（夙）の神との関連を説く最近の説に拠つても、宿神の名の由来はもう一つはつきりしない。

ここに一つ、気がかりな「宿」の用例がある。

『元亨釈書』巻十九、安珍の条に語られる

道成寺説話に出てくるものだ。安珍に思いを寄せ裏切られた寡婦が、怨み怒つて部屋にひきこもり大蛇に変身する場面である。

婦聞大怨瞋、乃入室不出、経宿為蛇、長二丈余、出宅赴途。

女は、「経宿為蛇」、宿を経て蛇と為る、が、それは長さが二丈余にも及ぶ大蛇であつた。

この場合の「宿」とは何だろうか。室に入っているのだから、宿（やど）という意味ではなからうし、「宿老」「宿願」のように形容詞的に用いられる「宿」でないことも明らかだ。

「経宿」を「宿を経て」と訓み下すかぎり、「宿」は、完全に蛇になる前の段階を示すと見ざるを得ない。

思い合はされるのは、蛇神としての春日若宮誕生伝説である。『春日若宮おん祭の神事芸能』（大東延和）が引く『若宮御根本縁』（一一五三）には注目すべき奥書がある。

長保五年三月三日巳時、従四殿板敷、心

太様（ココロブトヨウナル）物三升許落、暫程在従件物中五寸許蛇（クテナハ）出、従乾柱下登入四殿内畢、随彼心太様物失畢。

長保五年（一〇〇三）三月三日の巳の時、春日大社第四殿の板敷から、「心太様物」トコロテン様の物が三升ばかり落ち、しばらくしてその中から五寸ほどの蛇が出てきて、乾の柱を登つて四殿の内へ入つて行き、同時にトコロテン様の物も消え失せた。

このトコロテン様の物が「宿」かもしれない。あるいは「宿」は、脱皮後の蛇の抜け殻とも考えられるが、いずれにせよ、蛇の誕生に関わり誕生後是不必要となる何物かである。

人間にとって、それは、胞衣（えな）である。そして「翁」もまた、胞衣と深い関わりがある。

『明宿集』で、禅竹は、翁の水干を「母ノ胎ニシテワ胞衣トイワレシ禪ノ袖」と捉えている。また、播州坂越へ下つて大荒神となつた秦河勝について、「スナワチ大荒神ニテマシマス也。コレ、上ニ記ストコロノ、母ノ胎内ノ子ノ胞衣、禪ノ袖ト申セルニ符合セリ」と書き、追記には「胞衣ワスナワチ荒神ニテマシマセバ、コノ義合エリ」とある。

『明宿集』にあって、秦河勝、翁、宿神、荒神、胞衣はすべて等号で結べる存在である。

母胎中の胞衣が、胎児を包みながらこれを諸毒から守るように、翁も、強力な靈威により主尊を後ろから守護する。どちらも、象徴的に後戸の神なのである。だから、翁は、胞衣をかたどった水干を身につける。

中世の武者が、決死の覚悟で戦場に臨む際につける矢除けの布、母衣（ほろ）もまた胞衣と観じられていた。

これについては堀口育男氏の論文、『『ほろ』をめぐる象徴と説話』（『国語と国文学』平成二年三月号）が詳しい。さらに同論文によれば、山伏の着る笠である斑蓋も胞衣であった。

大永年間に成立したとされる『修験修要秘決集』は、「斑蓋」について、

夫修験所具斑蓋者、仏頂莊嚴天蓋、慈悲覆護形相也。凡天蓋者一切衆生住_二悲母胎内_一時戴_二胞衣_一義也。

と記している。「ここに言う『斑蓋』とは、山伏装束の内、檜で円形に作った雨露除けの笠のことであるが、その斑蓋が、仏頂莊嚴の天蓋であり、天蓋とは、一切衆生が悲母の胎内に住する時の胞衣を表すもの、というのであるから、約めて言えば、斑蓋は胞衣を表す、

ということになる」と堀口氏は述べる。

修験道にあって、斑蓋や天蓋が胞衣と考えられているとすると、修験が伝えた民俗芸能である備中神楽などで、舞処に奠で作った蛇が渡され、その上に天蓋が縄でつられ、ゆらされるのが、あらためて興味深く思われる。天蓋は、蛇にとつての胞衣、すなわち「宿」にあたるものではなからうか。

「道成寺」の後場、鐘が引き上げられた際、中で蛇に変身していた女がひきかすく唐織も、鱗姿を示すというより、「宿」をかぶっていることを見ることはできないだろうか。女は、強力な靈威を持つ「宿」すなわち唐織を腰にまといつけ、やがて打杖を持って僧に立ち向かうのである。蛇となった女が僧に破れるのは、鱗落しつまり「宿」を失なった後である。

（東京大学助教授）

